GOOD AGING

福岡グッドエイジャー賞 受賞者特別インタビュー

第八回

## 株式会社ブルク 代表取締役
# 池松 正剛 [ SEIGO IKEMATSU ]

どんなものでもいい。いくつになっても夢を持ち続ける。
心に思い描く夢があることは、自身がまだ努力や進化の過程にある証です。

概念に捉われない奔放さと、奇をてらわない繊細さ。そんな相反する要素が融合した独創的なテイストで、福岡市内を中心に数々の建築・リノベーション案件を手がける株式会社ブルク。入居者同士が自然を慈しむ心、という価値観の共有を目指した集合住宅等が福岡市都市景観賞をはじめ、数々の賞に選ばれるなど柔軟な発想から生まれる作品づくりが話題を集めています。

—まずは株式会社ブルクが設立されるまでの背景についてお教えいただけますか？

池松　大学卒業後、住宅メーカーに営業として入社しました。当初から「5年で独立。そのために5年間、トップセールスとしての成績を残す」という目標を自分の中で決めていたので、死にもの狂いで働き、どうにか達成することができました。独立後、昭和63年頃に税理士と共同で不動産会社を立ち上げました。ご存知の通り、当時はバブル前夜の好景気で、設立一年目の業績は素晴らしいものでした。しかし、瞬く間にバブルがはじけて急降下。10億以上の借金を抱え込みました。自ら選んだ道とはいえ、当時まだ20代だった若造には少々厳しい試練でしたね。結局、完済には10年ほどかかり、この時に身につけた不動産売買に関する知識やノウハウはその後、大きな武器となりました。いわゆる不良債権と呼ばれる物件を私がコンスタントに売却していく姿を見て、同じような物件を抱え困っている銀行関係の方々から「この物件はどうすれば売却できますか？」という相談も受けるようになりました。これは弊社の事業の一つである資産運用設計という部分にもリンクしています。ブルクを設立したのはそんなやりとりの渦中、平成元年のことです。

—建築関係という分野で仕事を進めて行く上での面白さを、どのような点に感じていますか？

池松　私自身は建築関係の仕事をしている実感はあまり無いんです。私の役目は奇抜な建物をデザインするのではなく、その場所にどう住むか？というライフスタイルのデザインにあります。特に意識しているのが、リビングでもオフィスでも、目に見えるところに必ず木や花など自然の要素を入れ込むこと。私自身が田舎育ちということもあり、身近に自然が無いと落ち着かないんです(笑)。それにどんなに立派な建物でも、土台は自然の物。自然の中に建てさせていただく、という感謝の気持ちが無ければ、出来上がった建物にもどこか人間のエゴとか傲慢さが垣間見えてしまいます。

—そんな「生活の中における自然との調和」を具現化させたのが、福岡市都市景観賞を受賞されたHOMEIアパートメントですね。

池松　そうですね。ここは5世帯からなる1LDKのアパートメントですが、各世帯の玄関先にはもみじを植えています。共用部分ではないので管理は入居者に委ねていますし、賃貸契約書には「もみじを枯らした場合は罰金をとります」というペナルティも明記しています。銀行や不動産屋さんからは、罰金なんて書くと借り手が嫌がりますよと言われますが、この規則の本質は罰金の徴収ではありません。もみじのお世話ができる方は、日常的に自然の草花を大切にしたいという感性を持っています。そんな方々が住んでいる場所に自分も居るということは一つの安心感となり、ステイタスにもつながってくると思うんです。

私はこの感性という点を常々意識しています。例えば不動産を探す時って、駅から○○分とか、築後○年など、つい杓子定規な視点に固まりがちですよね。私が土地や建物を下見する時にはむしろ「ああ、ここは吹く風が気持ちいいな」とか「日差しの具合が心地いいな」など、直感的な要素を重視します。逆にどんなに利便性が良い場所でも、心地よさが感じられないと見送ります。

たまに見かけますよね、駅前とかメインの通り沿いで便利な場所なのに、やたらと入居テナントが入れ替わるところって。事情は色々とあるのでしょうが、不動産探しは理屈だけではないと思います。

—そんな感受性を大切にする姿勢は、ご両親から教わったものなのでしょうか？

池松　それは何とも言えませんね。私の父親は怒るとちゃぶ台をひっくり返すような、典型的な昭和の人間でした。今の世の中は感情にまかせて怒るのはダメで、怒っている理由を相手に伝えた上で粛々と諭すのが正しい形とされていますが、私はそうは思いません。なぜなら、ガーッ！と怒られると、「怖いから今は静かにしておこう」という、その場の空気を読み取ろうとする想像力が生まれます。感情をグッと抑え、理由を説明していると次第に怒る気力も失せて、相手も悪いことをしたという反省の意識が弱まってしまいます。もちろん褒めることも大事ですが、空気を読む、相手の気持ちを察するという感覚を子供のうちから養っておくことも大事です。

私は住宅関係とは別に保育園を長年経営していましたが、「ケンカのためのケンカ」は大いにさせていました。ただし、イジメは良く無い。イジメっこには厳しく注意して、イジメられていた側に叩かせたこともあります。すると子供なりに理解するんですよ。「そうか、ボクはこんな痛いことを相手にさせていたんだ」って。

—ご長女は舞台女優、ご長男は俳優と、どちらも芸能関係のお仕事をされていますが、自己採点してみて、お二方にとってご自身はどういう父親だったと思いますか？

池松　普通の父親だったと思います。彼らが今の仕事を選んだ時も特に反対はしませんでしたし、この間、長男がテレビで「子供の頃は、オヤジにボコボコにされました」なんて言っていましたが、私はスパルタ派だった記憶は無いですね。もっとも、やった側と、やられた側とでは言い分は異なるでしょうけど(笑)。長女は保育園の頃から歌うことが大好きだったので、それを生かす仕事に就くことができて喜んでいるのではないでしょうか。その下に次女・次男がおりまして芸能関係ではないですが、それぞれに目標をもって頑張っているようです。

最後に、池松さんがお考えになる、理想の歳の重ね方とは？

池松　いつまでも夢を持ち続けることですね。誰でも子供の頃は「将来戦隊ヒーローになる！」とか、自由な夢を思い描くものですが、次第に現実が見えて来ると、「もうこの辺りで」と、自分で限界を作ってしまいがちです。私は来年で還暦ですが、まだまだ40代くらいの感覚ですし、やりたいことは山のようにあります。これからも社会ために役立つこと、そして社員にも喜んで働いてもらえるような仕事に取り組んでいきたいですね。

*Profile* 池松 正剛

1958年生まれ。大学卒業後、住宅メーカーに入社し、営業等の経験を活かし1989年に株式会社ブルクを一から設立。資産の有効活用、建築物の設計・デザインの業務を、お客様それぞれの立場に立つ独自の発想で行っている。今年で30周年を迎えた。また、2005年には有限会社イケマツマネジメントを設立しそれぞれにテーマを持ったビルやアパートを自ら創り、リノベーションし、暮らし方を提案している。また様々な社会貢献活動にも力を入れている。